
たゆたう魂のうた

あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たゆたう魂のうた

【NNコード】

N2345X

【作者名】

あきら
い！

【あらすじ】

ベルゼブブ復活の兆候が世界を混沌へと誘つ。復活を阻止すべく戦うナスター・シャの結末はどうなるのか。

ソニー・ヤ：「魔法使いと可愛い妖精の活躍をしっかりと見届けなさい！」

0章のボスはゴブリンよ。こんな雑魚に苦戦するなんて先が思いやられるわ。あ、大事なことを忘れていたわ。『この小説はフィクションであり登場する人物や集団は実在の個人および団体とは一切関

係ありません。

また、登場する神、天使、悪魔もこの小説での独自設定ですので、
気分を害したり、呪つたり祟つたりは勘弁くださいませ。』
では、本編で会いましょう。』

森が鳴いている。

森に住む鳥や動物たちも私と同じものを感じ取っているのかもしれない。数日前から予感はあった。それが今朝になると確信に変わった。何か良くないモノが近付いている。そう思い、ストの村を出た。しばらく歩きガサの街への道に出たところでヤツらに会ってしまった。

村の方へは逃げず、森へ入った。木々の間を走りながら隠れる場所を探す。追つて来ているのは「ゴブリン」が3匹。

「 そこの木の裏に隠れるわ。ナスター・シヤ」

私が走っている少し先を、小さな妖精が飛んでいる。小さな身体全体でソーニャが差し示している木の裏へ回り込んだ。木を背にして、しゃがみ込む。呼吸を整えようとするが恐怖で、息が吸えない。いつもは悪戯な笑みを浮かべてばかりいるソーニャも真剣な顔をしている。

「 ここで、迎え討つわ。相手は最弱のモンスターだから初めての実践には丁度いいわ。とはいっても力は大人の男くらいだから、捕まつたら、勝てない。隠れながら魔法でいくわ。いい。」

私は頷き、手にした杖を握りしめる。家にあつた唯一の武器。以前、兄が使っていたものだ。

ソーニャは、頭上で羽ばたいて説明を続ける。手は腰に当て、上半身を乗り出している。

「 いい。その杖は魔法を放つのを手伝ってくれる。意志を形にする杖よ。杖の先に、魔法の球をイメージして、魔法の球ができたら相手に飛ぶように念じればいいわ。」

手に持つた杖の先端にある宝石を見つめた。恐怖はあつたが、呼吸は落ち着いていた。

「 わかった。やってみる。」

「来たわ。一番手前にいるヤツから行くわよ。」

ゴブリン達はバラバラに広がり、こちらを探しているようだ。私は杖を胸の前に構えて、先端に魔法の球ができるようにイメージする。

光の粒子がしだい集まり、大きくなり、輝き始めた。それは生い茂る木々で薄暗い森にあって、明るい希望のようだった。少しの間、私は温かい光を放つ光球に見とれてしまった。

「杖の先を下げて。見つかるわ。」

ソーニャが木の陰から相手を見ている。魔法の球を作ることだけに集中していた私は、慌てて杖を低く構えなす。杖の先にできていた光球は消えてしまった。

「まあ、初めてだから仕方ないわね。まずは、杖の先に魔力を集めることに集中していいわ。次に私が合図したら相手に向かって飛ばす。いいわね？」

「うん。わかつたわ。」

真剣なソーニャの表情から、緊張感が伝わってくる。私は下げた杖の先に意識を集中する。さつきより早く魔法の球はできた。ソーニャと目が合い、頷いた。ソーニャは待つての合図をしたまま、少し上へ飛んでいる。木々が揺れる音とゴブリンの足音だけが聞こえる。ソーニャが体全体で合図を出した。

「おねがい。当たつて！」

私は、隠れていた木から一步出て杖を振ると、思わずそう叫んだ。杖の先から光球がゴブリンへ向かって飛ぶ。私たちとは逆の方向を見ていたゴブリンの頭に当たった。ゴブリンはゆっくりとその場で倒れていった。

「隠れて！」

ソーニャはそう言いながら、私の方へ飛んでくる。物音に気付いた他の2匹がこちらに近づいてくるのがわかった。

「もう一度行くわよ。準備して」

杖の先に意識を集中する。光球ができたと同時にソーニャは合図

を出して いた。木の陰から出ると、こちらに向かって いる 1 匹に向かつて光球を放つ。しかし、光球はゴブリンには当たらず、近くの木に当たつて弾けた。

「逃げるわよ。急いで」

ソリヤが指差した方に走った。ソリヤは後ろから付いてくる。

「それでハンドホールが疎か！」
眞懶になつたよつだけれど、「

ブリンの石飛礫だ。

やばいわね。最初の1匹も追つてきているわ。相当頭に来ち
やつてるみたい。あんな石に当たつたら怪我じやすまないかもね。

「二ヤの落ち着いた声の後方で、二ハリソ道の荒い息遣いか聞こえてくる。捕まつたらと思うと全身が震えた。必死で走る。前方が明るい。そのまま、森を抜けた。そして、立ち止る。崖だつた。

一飛ふわよ。杖をしげかり持つて、

考へてゐる暇はなかつた。杖を両手で持つと、その間をソーネヤが、握つた。手が上に上がり、足が地面から離れる。

うん
重たい

横に飛びながら、ゆっくりと降りていく。

ソリヤ頑張ってある下に湖があるわ

私は二二ハーリンから逃げた」とかできたと思って、笑顔で上を向いた。上で杖を持ちあげて懸命に羽ばたくソーニャが私と湖を見て、笑つた。

一
じ
せ
い、
落
ち
て
も
大
丈
夫
ね。

言い終わらないうちに、ソーヤが手を離す。

一
え
二
！

やられた。そう思つたが、小さなソーニャの姿がだんだんと小さく見えるようになる。その顔は、いつも悪戯な笑顔だった。

0章・1（後書き）

ソーニャ：「ああい。初投稿だからって、下手くそな文章ね。下手なのは皿をつぶつてあげるから早く〇章を終わらせなさい」

ガサの街からスクールへのゴブリン討伐の要請があった。私はゴブリンなんて何匹いようと大したクエストにはならないと思っていた。Cランク、Dランクの連中で十分なはずだ。5日前にスクールからは、Bランク1名とその他30名が出立していた。たかがゴブリン討伐と思ったが、ゴブリンは200を超えるらしい。それでも、ガサの自衛軍と協力すれば、街への被害はないだろうと思っていた。次にスクールへの連絡があつたのが3日前、ゴブリンどもは街から離れた位置で待機したままだが、その数は500に膨れ上がっていた。知らせがあつたその日にスクールは援軍を出した。私はゴブリンから街を守るなんて面倒なクエストには参加しなかつた。ランクに上がるために、もっと難関なクエストでポイントを稼ぎたかったからだ。しかし、偵察隊が送ってきた情報には興味があつた。500を超すゴブリン軍。その中心には、蠅王の紋章が掲げられているらしい。50年前の大戦。モンスター軍のシンボルは蠅王の紋章だった。私は直感を信じてゴブリン軍の様子が見える場所まで移動しているところだった。

「きやー。」

天使が降ってきた。そう思った。天使は湖の上でゆっくりと止まり、落ちた。

た。

堕ちた天使は、小さい妖精に岸まで引っ張られていた。

「ちょっとー、その人。手伝ってー」

ちっこい妖精は私がいることに驚いた様子もなく話しかけてきた。私は馬から降り助けに向かう。

「大丈夫? 手につかまつて」

私は天使の腕をとり、水の中から引っ張り出す。天使はふらふらと

少しだけ歩くと倒れかけた。抱きとめる。ボロボロだった。服はところどころ破けていた。そして、手足や顔は傷だらけだった。特に、左足首の出血がひどい。

「村に、ゴブリンたちが

消え入りそうな声だつた。ちっこい妖精が飛んできた。

「大丈夫よ、ナスター・シャ。村の方はドゥーニャがなんとかしてくれるから。」

小さな子供に言い聞かせるような話し方だつた。それを聞いて安心したのか、ナスター・シャの身体から力が抜けたようだ。

「気絶しただけのようね。傷の手当てをしないと。服も乾かしたがいいわね。そちらの妖精さん。木の枝とか集めてもらえるかしら。幸い湖の水はきれいだつた。傷口を水で洗い、自分の服から袖の破き、足首に巻いた。

「これくらいでいい？」

いつの間にか、ちっこい妖精は木の枝を集めきていた。

「いいわ。ちょっと、離れて。」

私は山積みしてある枝に向かつて両手をかざす。

「ファイアボール（極小）」

両手の間の炎が大きくならないように気をつける。暫くすると、枝も燃えだしたようだ。

両手を解ぐ。それから、ナスター・シャを温かい場所へ移動させる。濡れた髪を拭く。顔の汚れを落とす。まだ、幼さが残る顔だ。白い柔らかい肌に傷が痛々しい。ただ、傷跡が残りそうなものは無い。落ち着くと呪文を唱える時に小声になつた自分に苦笑した。小さい炎のイメージが声に出たようだ。

「妖精さん。何があつたか詳しく教えてくれないかな。」

「わかつたわ。妖精さんじゃ言いにくいでしょ。私はソーニャと呼んでくれて構わないわ。そつちで寝ているのがナスター・シャよ、クレア。」

名前を呼ばれたことに驚いた。それが、わずかに表情にでたよう

だ。ソーニャの不敵な笑みがそれを物語つていた。

0章・2（後書き）

ソーニャ：「キャラ設定が定まってないんじゃなくて。『たゆたう魂のうた』じゃなくて、『たゆたうあきりの（自主規制）』にタイトル変更ね。」

「村が

起きた時、そう叫んでいた。ソーニャはこじらを見て、黙つて首を振る。涙がこみ上げてくる。

「ナスター・シャ。大丈夫よ。あなたが来てから2時間くらいしか経っていないわ。」

空を見上げる。太陽は真上にあった。ソーニャの方を見ると田をそらして肩を震わせている。先ほどとは違う意味で涙が出てきた。とりあえず、ソーニャは放つておく。

「ありがとう。えーっと。」

「クレアよ。」

クレアが手を差し伸べる。綺麗で、凛とした女性だった。少し戸惑い握手をした。

「ありがとう。クレア。」

気のせいいか、クレアの顔があかくなつたようなきがした。

「はいはい。ばか面を笑顔で緩ませてないで早くドゥーニャのところに行くわよ。」

拗ねたようなソーニャの口調だった。村のことが心配になつた私は、立ち上がりこうとした。

「いっ！」

足に激痛が走った。足首に布が巻かれていることに気付いた。

「応急処置はしたけど、後でちゃんとした治療をしなくてはいけないわね。私は回復系の呪文はさっぱりだから。」

そういうと、クレアは立ち上がり馬を呼んだ。近くで草を食んでいた馬がこちらへ駆けてくる。

「大人しいヤツを借りてきたから乗りなさい。その足じゃ歩くのは無理でしょ。」

クレアが、差し出した手を握り、起き上った。馬は私の横まで来て

大人しくしている。

「よろしく。」

撫でながら挨拶をし、騎乗する。

「早いところがないと陽が落ちるまでに間に合わないわよ。暗くなつてからだとヤツに分があるわ。」

ソーニャが馬の頭の上に寝転がり話している。

「それに早くしないと、ドゥーニャが一人で始めかねないわよ。言い終わると、欠伸をして眠り始めてしまった。眠っているから早く移動しろということだらう。」

「じゃ、行きましよう。」

クレアが歩きだす。急いでいるようだ。私は初めての乗馬で落ちないように気をつけていた。

乾いた風が吹いていた。山間を抜けて広い草原へ出た。ここからは北へ行くとガサの街、北東へ進むとストの村だ。そしてゴブリン達は、北東へ進む道の途中にいた。

「まあいわね。思つたより数が多い。それに、武装している。ゴブリン達の中に指導者がいるみたいね。街を襲う前に村で体制を整えるつもりなのかしら。」

クレアの言うとおり、ゴブリン達はそれぞれ武器を持っている。剣、槍、弓と同じ武器を持った集団がいくつもあるようだ。そして、こちらに側にいるゴブリンは大きな盾を持って、横に広がっている。クレアの声から緊張が伝わってくる。

「これ以上は、近付くと危ないわね。ゴブリンの100や200なら魔法で蹴散らせると思っていたけど、後方は盾を持ったやつらが備えている。遠くからの魔法では防がれるわね。でも、こんな何もない場所じや、近づけない。どうやら街にスクールから応援が行つたことがばれているみたいね。ゴブリンのくせに魔法使い対策するなんて、油断していたわ。でも、なぜ動かないのかしら、村を攻めるのなら・・・」

「動けないのよ。」

ソーニャが田を擦つていて。まだ、眠り足りないとこつ感じだ。

「どうこつことなの？」

「ドゥーニャの罠に掛かっているさすよ。さて、私たちを追つていた奴らは戻つていいかな？」

ソーニャが見ていて方を見る。集まつていてるゴブリン達と少し離れたところに『3匹』。それぞれの背中に木の蔓で『1』、『2』、『3』と番号が書かれている。

「ちやんと、戻つて来てるじゃない。偉い。偉い。」

田の前のゴブリン達にまつたく動搖していないのか、ソーニャの声は明るい。それどころか、これから起じる」と楽しみにしているようだ。

「クレア。あのゴブリン達。もひつちやうわよ。」

クレアは黙つている。ソーニャがニヤリと笑つ。

「ドゥーニャ。ここまではロジヤーの言つた通りに進んでいるわ。ゴブリン掃除開始よ。」

0章・3（後書き）

ソーニヤ「可笑しいわ。私って、可愛いマスコット的な存在だって、聞いていたのに。これじゃ、ただの意地の悪い妖精じゃない。契約違反よ。断固抗議するわ」

「ひとつ・・・ふたつ・・・」

それは、とても清んでいて、よく透る声だった。それでいて、抑揚がなく、感情が感じられない声だった。一定の間隔で数えられていく。それから少し遅れて、ゴブリン頭が飛び、血しぶきがあがる。一匹ずつ。同じ感覚。そして、確実に血しぶきが上がっていく。その血しぶきの中を黒い影が移動していく。ソーニャと同じくらいの大きさ。黒い着物を着ている。ゴブリンの肩に乗る。手から出た黒い霧がゴブリンの首を包む。次のゴブリンの肩へと飛ぶ。頭が飛ぶ。血しぶきがあがる。赤と黒の中で整った顔が見える。すぐにわかつた。あれが、ドゥーニャだ。淡々と頭を飛ばしていく。首を飛ばされたゴブリンの身体は暫く血を噴き出し、その場で直立している。ソーニャと田が合つた。ソーニャがこちらの感情を見透かしたように笑みを浮かべる。

「大丈夫そうね。少し近付きましょ。」

田の前で起きていることに思考が追いつかない。表情には出さないようにするだけで精一杯だった。ソーニャは、田の前の惨劇に何の感情も抱いていないようだ。ナスター・シャは田を背けている。

「あの辺りまでは大丈夫。」

ソーニャが指をさした先に田をやる。どうやら地面に魔法陣が書かれているようだ。魔法陣は円形でゴブリン達の中心から半径50cmほどはある。田の中のゴブリン達は動くことができずにいる。まるで巨大な蜘蛛巣のようだ。これほどの規模の魔法陣はスクールの魔術師でも作れる者そんなにいないだろう。

まだ、血しぶきは上がり続けている。一定の間隔で数えられていく声に背筋が凍り付くようだ。方々でゴブリン達の悲鳴が聞こえる。逃げようにも逃げられず、血しぶきが迫つてくる恐怖。ゴブリンに同情する。

「五月蠅い。耳障りな声で鳴かないでほしいわ。」

ドゥーニャが数えるのを止めた。黒い霧が騒いでいたゴブリン達に伸びる。一瞬の静寂が訪れる。一瞬の静寂は一斉に噴出した血の音で破られた。

「どこまで数えたかわからなくなつたわ。ソーニャ。」

ソーニャが少し高い位置まで飛ぶ。

「今ので、477ね。まだ、200近く残つてゐるみたい。」

ドゥーニャはため息をつき、再びは首を刎ねる。大地はゴブリンの血でどす黒く染まつてゐる。風に乗つて咽返るよつた血の臭いがした。

「ソーニャ！ お願い。ドゥーニャに止めるよつて言つて。」

ナスター・シャの声は震えていた。顔は青白くなつてゐる。

「ダメよ。ナスター・シャ。ここで全滅させないと。いつ、村に危険が及ぶか、わかないわ。」

「感じるの。ソーニャ。何か暗いものが大きくなつてゐるの。お願い。」

ソーニャの表情に一瞬、悲痛な思いを感じた。

「やつぱり、わかるのね。でもダメよ。」

ナスター・シャは、呼吸をするのもやつとといつ感じだ。ナスター・シャの様子で私は確信した。

「ソーニャ。何を知つてゐるの？ 何を考えてゐるの？」

聞かなくても予想はついていた。それでも、私は聞かずにはいらなかつた。数日前から。蠅王の紋章を聞いた時から。期待していだ。私がスクールで数少ないAランクに上がるための標的。そして、ナスター・シャはそれの存在を感じ取ることができるようだ。

「もう少しよ。見ていたらわかるわ。」

そう言つてソーニャは視線をドゥーニャの方に移す。

「これで、650。」

ドゥーニャは、数えながら首を刎ねると、動きを止めた。整つた顔からは疲れは感じない。黒い着物は返り血を浴びることもなかつ

たようだ。ゴブリンは残り数匹になっていた。その中に神官のような服装のゴブリンがいる。あれがこの軍を指揮していたのだ。手には觸體がついた杖を持っている。残りの数匹は騒かずにドゥーニャを見みつけている。ドゥーニャの表情が一瞬不快そうに歪む。黒い霧がゴブリン達の首に絡みつく。頭が宙に舞う。残りは神官だけになっていた。

「ワレヲ コロスガヨイ イケニヒニ ニンゲンドモヲ マキコ
メナカツタノハ クチオシイガ」

話しを最後まで聞かず、ドゥーニャは首を刎ねていた。

「どうでもいいけど、息が臭いのよ。」

宙に舞つたゴブリンの顔は笑みを浮かべたままだった。

「来る。クレア、後は頼むわ。バラバラにしてやって。ナスター
シヤは少し離れなさい。」

ソーニャは、馬の手綱を引っ張り後方に下がる。ゴブリンの身体が倒れる音が聞こえた。手にしていた杖の觸體に、ゴブリン達全員の血が集まっていく。はつきりと觸體から禍々しいものを感じる。冷たい汗が噴き出してくる。足が震える。觸體を中心として血が巨大なゴブリンの形をとる。ドゥーニャは巨大ゴブリンから少し距離をとった。私も巨大ゴブリンの動きに集中する。ドゥーニャが先に仕掛けた。黒い霧が大きな鎌の形になる。脚を切断したかのように見えた。しかし、血液でできているゴブリンの身体は元に戻つていく。

ゴブリンは大きく振りかぶり、ドゥーニャに殴りかかる。ドゥーニャはギリギリの所で交わしている。ドゥーニャがこちらに視線を向けているのに気付いた。どうやら、ゴブリンの攻撃を引きつけてくれているようだ。こちらに攻撃がこないと分かれば強力な呪文が使える。こういう得体の知れない強大な敵には、出し惜しみをしていれる余裕はない。精神を集中し、術式を開いていく。巨大ゴブリンの足元に魔力を集中させる。

「風の妖精、エーリアルよ。歌え。舞え。」

「ゴブリンの足元の魔法陣が光輝く。ドゥーニャが回る。跳ぶ。ゴブリンは態勢を崩した。今だ。

「テンペスト！」

ゴブリンを風の柱包み込む。風の刃が切り刻む。血液でできたゴブリンの身体は小さく分かれ宙に舞う。自分が得意とする風系統の最強呪文だ。まだ、術式を完成させるまでに時間がかかるのと、唱えた時に袖が破けるという問題があった。

「こんなことなら、完成させておくべきだったわね。」

ナスター・シヤの治療で破いた袖が、更に先まで破けている。また、服を買いなおさないといけない。そんなことを考えていた。

「ナスター・シヤ。今よ。」

後ろの方からソーニャの声。光が空中で弾ける。

「外れた。クレア。まだ、終わってないわ。」

光が弾けた先に觸體が見えた。目が妖しく光る。落ちていく觸體にバラバラになつた巨大ゴブリンが集まつっていく。今度は人型ではない。脚が6本生えていく。大きな頭、胸、腹。羽が3対。目が赤く光る。蠅王だ。

「クレア。もう一度。バラバラにして。」

ソーニャが叫んでいる。その横には、ナスター・シヤが杖を持ち、なんとか立っている。

「やるしかないよね。」

ソーニャに答えるというよりは自分に言い聞かせていた。ドゥーニャが切りかかっていた。脚を一本切り落とす。どうやら、足と羽は液体から固体になりつつあるようだ。羽がゆっくりと動き出す。

「飛ぶつもり? ドゥーニャ。動きを止めて。」

「もうやつてるわ。聞かないのよ。」

ソーニャとドゥーニャの声に焦りが感じられる。こうなる前に終わる予定だったのだろう。蠅王の足元には、ゴブリン達の動きを止めていた蜘蛛の巣のような魔法陣が光っている。

「足は私がやるわ。ドゥーニャは羽を」

ソーニャの周りに魔法を使った痕跡が光る。蠅王の足に草が絡みつく。バインドの呪文だ。ドゥーニャが切った足はすでに再生している。

再生が早すぎる。ソーニャとドゥーニャは動きを止めるので精一杯だ。蠅王が飛んだら、動きを止めることはできないだろう。足の震えが止まらない。蠅の姿になつてから黒い威圧感が身体を襲つていった。少し離れた自分ですら膝をつきそうになる。ドゥーニャの動きは確実に悪くなっていた。絶望的な状況だ。暗い感情に支配されつつあつた私を光が元に戻した。ナスター・シャが魔法を放つチャンスを待つている。顔色は良くないが、落ち着いて構えている。ナスター・シャが作り出す光の球が太陽のように温かく感じる。まだ、戦える。それに、私は本当の絶望を知つている。全てを失つたあの日を。何の力を持つていなかつたあの頃を。

私は動きを止めた蠅王を中心に術式を開発する。魔力を集中する。バインドが破られようとしている。ドゥーニャが跳ぶ。鎌が羽を両断する。ソーニャがさらにバインドを唱えたようだ。草が蠅王の全身に絡みつく。私は更に魔力を集中する。蠅王の足元の魔法陣が輝く。その周りに帯状の魔法陣が輝く。ドゥーニャの鎌が頭と胸の間に刺さる。私はまだ魔力を集中する。指の先に痛みが走つた。ドゥーニャが跳ぶ。溜めた魔力を解き放つ。

「テンペスト！」

叫んだ。自暴自棄だつたのがわかる。魔力を制御できずに、はね返つてくる。手に痛みが走る。気力を振り絞る。蠅王は風の刃に包まれた。徐々に宙に舞い上がり刻まれていく。

風の柱が収束する。觸體がどこにいつたのか探す。すでに陽は落ち見えない。ナスター・シャの方を見る。見えたようだ。いや、感じたのだろう。杖を振りかざす。光球が矢のように飛んでいく。觸體の額を打ち抜いた。ドゥーニャが跳んだ。觸體が2つ、4つと切られる。ドサッと音がした。ナスター・シャが倒れていた。駆けよる。

「眠っているだけみたいね。」

ソーニャが安堵のため息をついた。私は手を差し伸べようとして止めた。手に感覚がなかつた。まだまだ、テンペストの完成には時間がかかりそうだ。

「ヨクモ ワレラガ ヒガンヲ キサマラモ ミチヅレダ」
声をした方を振り向く。ゴブリン達の死体が集まつていく。

「しつこいわね。これだから、不細工なヤツは嫌いなのよ。」

「キサマ」

ゴブリンゾンビはドゥーニャに襲いかかる。ドゥーニャは、交わし鎌で切り付ける。しかし、刃が通らない。

「キサマガ ハロシタ ドウホウ スベテノカラダダ ソノティ
ドノ ハウゲキナド。」

「痛みも感じないなんて、どうしようかしら。」

ドゥーニャは攻撃をせずに避けることに専念している。「ゴブリンゾンビはここぞとばかりに攻撃を続いている。完全に標的はドゥーニャ一人だ。

「ドゥーニャは、魔力が残つてないみたい。
最初に大きな魔法を使つたから。」

ソーニャも困った感じで話しかけてくる。蠅王の姿になつた辺りから思惑と違つたのは確実だろう。ただ、焦つた感じはもうない。私も少し落ち着いていた。さつきドゥーニャが切り付けた傷が再生していない。ゴブリンゾンビは避け続けるドゥーニャに怒り心頭という感じだ。ドゥーニャが一人でゴブリン達を殺したのは全ての攻撃を一人で引き受けるためだつたのかもしれない。

「クレア。ドゥーニャが元気な内に隙をみて仕掛けるわよ。」

ソーニャが小声で囁く。ナスター・シャは倒れたまだ。ドゥーニャが大きく跳ぶ。

「今よ。」

ソーニャがバインドを唱える。草がゴブリンゾンビの手足を封じる。ドゥーニャが、ゴブリンゾンビの頭に鎌を振り下ろす。

「ファイアボール」

「ゴブリンゾンビの身体が炎に包まれる。手足を封じていた草が燃える。暴れまわる。

「さすがに、あれだけ大きいと一撃じゃ無理ね。」

ソーニャの声に疲労が感じられる。私の魔力も残り少ない。テンペストのような強力な魔法は無理だ。アンデッドには炎か光の魔法だが、自分が使えるのは、ファイアボールだけだ。

「オノレ コノママ クチハテテナルモノカ。」

ゴブリンゾンビが辺りを見渡す。ナスター・シャが倒れている方を見て動きが止まった。

「アノコムスメ アノコムスメサエ イナケレバ フレラガ アルジハ ヤラレハ シナカツタ。」

ゴブリンゾンビがナスター・シャに向かって歩きだす。ソーニャがバインドを唱える。ドゥー・ニヤが切り付ける。しかし、刃は弾かれる。体力も限界のようだ。私は覚悟を決めた。

まだ、出会つて間もない少女のために。

残り全ての魔力を手に集める。両手の間の火球が大きくなる。

「この貸しは大きいわよ。私がAクラスに上がるまで、こき使つてやるんだから・・・。ファイアボール」

もはや、手の感覚はなかつた。それでも、ゴブリンゾンビに向けて火球を投げつけていた。ゴブリンゾンビの身体に命中した。爆発。勝つた。爆風が自分の所までとどいた。私はそのまま倒れこんだ。空は星が輝いていた。すでに感覚が無くなつた手を伸ばす。ただ、星だけが見えた。一段と明るく輝く星をだけが。

0章・4（後書き）

ソーニャ「ドゥーニャ、なんかチートな強さになつたわね。」

ドゥーニャ「作者も予定外らしいわよ。でも、私の出番はしばらくな
無いらしいから」

ソーニャ「あれじやない？人気投票で上位になつたら再登場つてや
つ」

ドゥーニャ「人気投票するまで、この小説は続くのかしら？」

ソーニャ「続かないわね。作者がヘタれだから。だいたい、この（
自主規制）小説を誰が読むのかしら」

ドゥーニャ「誰も読まないわね。こんな稚拙な文章。あら、ソーニ
ヤ。あなた次の場面の準備をしないと」

ソーニャ「もうこんな時間！急がないと朝になつちゃうじやない。
じや、ドゥーニャ。またね」

声が聞こえる。

「姉さん。ルシフュルは役に立っているかい？」
子供っぽい男の子の声だ。

「ええ。ルー君のおかげで調査は順調よ。今も、あの星に降りて頑張ってくれているわ。」

優しい女性の声だ。

「よかつた。姉さんのためにもう一体作って来たんだ。ルシフュルを元にして。全体の能力は下がつたけど、すばしつこいやツなんだ。また、名前を付けてあげてよ。」

「まあ、可愛い子ね。うふふ。無邪気に飛び回って。そうね・・・。ベルゼブブという名前がいいわ。」

「よし、ベルゼブブ。今日からお前は姉さんの言ひこと聞くんだ。」

「うふふ。よろしくね。ベルちゃん。」

「姉さん。あと、僕が使うために4体作ったんだけど、ここにちらも、姉さんに決めてもらつて良いかな？」

「まあ、こんにちは。この子たちも翼が6枚あるのね。じゃあ、どうしようかしら。うーん。そうね。よし。決めた。このしつかりしてそうな子がミカエル。隣の大人しそうな子がガブリエル。賢そうな子がラファエル。やんちゃそうな子がウリエルね。どう?」

「うん。いいと思うよ。」

「よろしくね。ミカエルくん、ガブリエルちゃん、ラファエルくん、ウリエルくん。ベルちゃんとも仲良くしてね。」

「よし、ミカエル、ラファエル、ウリエルは自分の仕事に行って良い。ガブリエルはここでメムの手伝いだ。」

「そういうえば、メムが言つていたわね。生命の樹から新しく産まれそうな子がいるんでしょ?。今度はどんな子かしら。」

「今度は、小さいヤツがいいな。」の前のバハムートみたいなのが増えたら、船の中が狭くなっちゃうよ。」

「うふふ。早くあの星に降りれるようにならないといけないわね。ベルちゃんはルー君を手伝つてもらおうかしら。その前にシンとメムを紹介しましょうか？メムは後でここに来ると言つていたわね。じゃあ、先にシンに会いに行きましょう。シンはバハムートちゃんの所かしら？」

「そうだよ。ガブリエルはここでメムが来るのを待て。さあ、行こうか。姉さん。」

笑い声が遠ざかっていく。静かになった。まだ、眠たいようだ。意識がまどろんでいく。

目を覚ます。いつもの孤児院の天井だった。起き上りうつとする。身体が重い。意識がはつきりとしない。

「やつと、起きたのね。」

ソーニャのいつもの明るい声だ。

「あれから3日も寝てたのよ。このねぼすけ。」

「あうつ。」

おでこを指でつつかれた。ソーニャはいつもの悪戯な笑みだ。ちよつと、田の下に疲れが見える。

「ふえ～、いた～い。」

ほっぺたを引っ張られた。そして、横に縦に引っ張られる。

「相変わらずしまりの無い顔ね。」

ソーニャは、息をついた。ちよつと、安心したような笑顔を見せる。つられて私も笑顔になる。

「痛つ。」

ソーニャが手を離す前に横に強く引っ張つた。ほっぺたが熱い。「いつまでも夢心地でいるから、起こしてあげたのよ。痛いから夢じゃないでしょ。」

「そうだ。クレアは？」

「昨日、旅立つて行つたわ。」

ソーニャが優しく微笑む。

「そう、お礼を言いたかつたのに。」

「用事を済ましたら、また来るそつよ。」

「本当に? よかった。」

「みんなに、田が覚めたこと。教えてくるわ。あと、なんか食べるわよね?」

「うん。」

「わかつた。持ってきてあげるから、寝てなさい。」

ソーニャが部屋から出て行くと、独りで天井を眺めた。3日前の出来事を思い出す。ゴブリンから逃げ、クレアに会った。そして、ゴブリンの血で出来た怪物と戦つたこと。生き延びることができたのが夢のようだった。しかし、夢では無いとほっぺたの痛みが教えてくれる。そう夢では無い。ただ、魔法を唱えるクレアの姿を思い出すと夢だったのではないかと思えてくる。白く細い手をかざし、緑色に光る魔法陣。その光が広がり、長い黒髪をなびかせて、魔法を放つ。あの時は、その後ろ姿が頼もしかった。クレアとは、もうと話しがしたいと思つた。

「ナスター・シャお姉ちゃん。起きたの？」

「私が持つてく。」

子供たちの声が聞こえる。みんな心配してくれたみたいだ。

「気分はどうだい？」

「大丈夫みたい。ありがと。シスター。」

シスターは孤児院の母親のような存在だった。以前、笑うと目じりに浮かぶシワがチャームポイントと言っていた。シスターはベッドの横にある椅子に腰かけた。スープの良い香りがする。

「食欲はあるみたいね。」

私はスープを受けとると、1口、2口とスプーンを口に運んだ。温かいスープが身体に沁みこんでいく。

「みんな、心配していたんだよ。全然起きないんだから。ソーニャは詳しく教えてくれないし。」

ソーニャはあの出来事のことを話していないようだ。私も話すべきか迷つた。まず、どう説明してよいのかわからなかつた。シスターが私の顔を覗き込む。目尻にシワが浮かぶ。

「話したくなつた時に、話してちょうだい。」

暫く、シスターは何も聞かず、隣で微笑んでいた。私は残りのスープを最後まで飲みほした。

「さて、そろそろソーニャを助けてあげないとね。」

「ありがとう。シスター。」

シスターは一度笑顔を見せると部屋を出て行つた。暫くして、ソーニャが部屋に飛び込んでくる。髪がボサボサになっている。

「あいつら、ゴブリンより厄介だわ。」

ソーニャは子供の相手が苦手だった。この孤児院には、12年くらい前に来た私たちと4年前に来た子たちが暮らしていた。まだ小さい子たちはソーニャへの遠慮がない。いきなり掴みかかって来る子供たちは、ソーニャの天敵だった。ドゥーニャはそれを嫌つてか孤児院にいる時は姿を隠している。口は悪いがソーニャは良い子だ。

「あー、イラつくわ。」

「キヤッ。」

顔に衝撃が走った。ソーニャの足が顔にめり込んだ。

「ナスター・シャ。ニヤニヤして。そんなに私が遊ばれているのがうれしいのかしら?」

口だけではなく、足癖も手癖も悪い。でも、良い子だ。きっと。

「元気になつたなら話したいことがあるの。出かけるわよ。」

「どこに?」

「ゴブリン達がいたところまでよ。あの杖も持つてきなさい。」

「ちょっと、待つてよ。ソーニャ。」

起き上ると杖を取つて、ソーニャの後を追つ。まだ、身体が重い。シスターと子供たちと少し言葉を交わし、孤児院を出た。陽の光が眩しい。外では私と同じくらいのみんなが畑で仕事中だった。みんなが声をかけてくれる。私は元気になつたことを、手を大きく振つて知らせる。みんなの笑顔が好きだった。孤児院に住むみんなは私の家族なのだ。

村を出て、ゴブリン達がいたところまで歩いた。

「ここで良いわ。」

「えつ」

ソーニャが動きを止める。自分の目を疑つた。ゴブリン達が倒れていたところは何も無かつたかのように、草が生い茂つていた。

「片付けるのは大変だったのよ。誰かさん達は倒れるし、ドゥー

「ヤは手伝わないし。」

ソーニャは肩を押されて疲れたという仕草をしながら言った。それは言つても、ここから見える一面に死体が転がっていたはずだつた。思い出しだけでも気分が悪くなつてくる。ソーニャがこちらを見てため息をつく。

「ナスター・シャ。あの時、觸體を狙つて、魔法を使うよつて言つたこと覚えているわよね？」

ソーニャが見ている方向には地面が大きくえぐり取られた跡が二つあつた。クレアがテンペストを使つた後だ。離れている方の跡が明らかに大きい。あの時、一度目は当たらなかつた。テンペストで巻き起こつた風は、「地面」と「ゴブリン」を引き裂いた。「ゴブリン」の中から出てきた觸體を狙つた光球は舞い上がり届かなかつた。

「ええ、覚えているわ。」

「もう一度、魔法を使ってみて。」

そう言つて、ソーニャは空高く緑色の球を投げる。

「2回目の時を思い出して。当てるだけじゃなくて、貫くの。」
2回目。バラバラになつたゴブリンの身体は觸體を中心にして大きな蠅の姿になつた。ただ、ゴブリンの姿より恐ろしい感じはしなかつた。蠅の姿になつた後、目が合つたような気がした。そして、その目はとても悲しげに感じられた。それに、目の前にはクレアがいた。私は觸體に当てるだけに意識を集中できた。2回目のテンペストは巻き上がつた地面を粉々にぐだいた。蠅の中から飛び出した觸體を遮る物は何もなかつた。しかし、狙い定めて放つた光球は一度外れた。風で觸體が大きくそれたのだった。その時、当たるよう念じた。風では曲がるような軟な当たりかたではなく、風を裂くような矢のように。

私はその時の感じを思い出す。杖の先に意識を集中する。杖の先に光球ができる。

「行くわよー。」

高く舞う緑色の球の一点に狙いを定める。杖の先から飛ぶ光は矢のように鋭く緑色の球に向かつて飛ぶ。当たると思った時、緑色の球は横に動いた。光の矢はそのまま空へ消えた。

「はあー、あの時は、火事場のなんとかだったみたいね。」

ソーニャが、肩を落とす。

「少し練習する必要があるみたいね。」

「ううう。」

ソーニャに突かれる。

「まあ、まだ2回目なんだし、こんなものよね。まぐれでも、蠅の姿になつたアレを退けたんだから。」

ソーニャは大きく穴を開いた方を見ている。その穴を見ていると否応にもあの時の光景が思い出される。山のような巨体、真っ赤に光る目。薄く透ける巨大な羽。そして、飛び立とうとする時に感じた、泣いている子供のような姿が強く思い出される。

「風が強くなってきたわね。そろそろ、戻るわよ。」

風はいつもと同じ緑の香りを運んでいた。

0章・5（後書き）

ソーニャ「私つて、かわいくないのかな」

ドゥーニャ「愛しのナスター・シャのハートをクレアに射とめられて寂しいのね」

ソーニャ「だいたい、あきらが私の可愛をについて本文で触れないのがダメなのよ。」

ドゥーニャ「そうね。ソーニャの可愛さを表現するとしたらこんな感じかしら」

陽の光をあびて輝く悪魔蛙の血液のよつな、鮮やかな髪、朝露で濡れた鬼蜘蛛の糸のような、纖細な羽、

無邪気に微笑むその笑顔は引っこ抜かれたマンドラ「コラも絶句して裸足で駆けだすに違いない

ソーニャ「ありがと。ドゥーニャ。もつあきらめたわ。」

あの戦いから20日が経つていた。勝利した翌日、スト村の孤児院で目を覚ました。魔力を使い果たして倒れた私をソーニャが運んだようだ。隣のベッドにはナスター・シャが眠っていた。ナスター・シャは眠り続けていた。外傷よりも初めて魔法を使つたせいだろう。私はナスター・シャが目を覚ます前に村を出た。ガサの街に向かつたスクールの連中に簡単な連絡を済まし、スクールへと向かつた。ゴブリンと蠅王についてレポートを提出するためだ。魔王を崇拜するゴブリンたちが妖しい秘術で蠅王の姿になつたという程度のことだ。学長もこの意見に同意した。アレは本物に遠く及ばない存在だったということだ。それから、ナスター・シャとソーニャ、ドゥーニャのことを報告した。ソーニャ、ドゥーニャのことを学長は知つていた。スクールでも数少ないランクA。その最下位であるイワンの使い魔だということだ。変人と呼ばれる男である。町外れにあるボロ家に引きこもっているため姿を見たものは殆どいないと言われている。噂しか聞いたことは無いが好きにはなれそうにない。ランクAといえば、皆から尊敬され、二つ名を持つ者ばかりである。スクール最強のドラゴンスレイヤーなど憧れと畏怖の念を込めて呼ばれている。そこまで考え、単純王、野獣など呼ばれている連中がいることを思い出した。所詮、暇な連中が面白がつて付けているだけだ。なぜなら、私は知つている。私のことを可哀そうな黒猫と言つていいとヤツらいることを。噂のことはともかく、やはり、変人のことは気に食わない。あのドゥーニャの戦い方。あの時、ゴブリンたちの動きを止めたのはドゥーニャのバインドだ。見たことがない種類のバインドだったが、あれほど広範囲に使うには事前に準備していたはずだ。あの日に何が起こるか知つていたとしか思えなかつた。そしてその計画の中に私が入つていた。利用されたのだ。気に食わない。今思えば、「ゴブリンたちの中に蠅王の紋章が掲げられている」という

のは誰からの報告だつたのか。討伐隊に参加していくい私の耳に届くはずが無い情報だつた。それも街へ援軍にいった連中より早くにだ。なぜ、私を利用したかはわからないが私にも収穫はあつた。ナスター・シャだ。あの娘にはどういうわけか、蠅王の気配を察知できる能力があるようだ。このことはスクールへは報告しない。ただ、魔法使いの素質があるとしか報告しなかつた。学長はナスター・シャをスクールに入れることに決めた。魔法が使える者は貴重な戦力なのだ。スクールとしては出来るだけ多くの者を手元に置いておきたいという考えだ。Aランクともなれば、一人でドラゴンを相手にできるほどである。もっとも、ナスター・シャがどれほどの魔法使いになれるかは未知数なわけだが。

ストの村が見えてきた。数軒の家と畠があるだけの小さな村だが、落ち着いた良い場所だ。私は、この場所からナスター・シャを戦場へ連れ出そうとしている。村へ入ると青年たちが畠で作業をしている。年齢は私と同じくらいだ。好奇な視線をこちらに向けている。20日前に会つてはいるが、そんなによそ者が珍しいのか。

「きれいなお姉ちゃんだ。シスター、きれいなお姉ちゃんが来たよ。」

孤児院の中に向かつて小さな女の子が叫ぶ。無邪気な笑顔で見上げている。見覚えがある。20日前に村を出る時に元気よく手を振つていた子だ。私は馬から降り、女の子に挨拶をする。

「あら、クレアさん。お久しぶりね。中にどうぞ。」

女性が出てきた。シスターと呼ばれているが、じことなく近所をおばちゃんと言つた感じだ。少し馴れ馴れしいとも思つたが、その笑顔を見えると心地よい感じがする。

「ナスター・シャ、クレアさんよ。」

ナスター・シャは洗濯したシーツを干しているところだつた。

「クレア。」

ナスター・シャが振り返り私の名前を呼ぶ。笑顔が太陽の光の元で一段と輝いて見えた。初めて会つた時はボサボサの髪で身体中に土や

葉っぱがついていて、男の子かと思った。今は、質素だが清潔な服装で、元気な女の子見える。

「見つめあつてるんじゃないわよ。」

ソーニャが間に入ってきた。相変わらずナスター・シャの周りを飛び回っているようだ。

「ナスター・シャ、あまりクレアを信用しちゃダメだからね。この女、倒れた後、手を空に伸ばして『これでナスター・シャは私のものよ。こき使つてやるわ。ぐへへへ』なんて言つてたのよ。いやらしい手つきでナスター・シャのこと、こねくり回してたに違いないわ。」ソーニャが何やらクネクネしながら言いだした。完全に否定できない。ナスター・シャが困惑した表情になる。

「まあ、ナスター・シャには、こねくり回す胸なんか無いけどね。」ナスター・シャが落ち込んでいる。表情が読み易い子だ。ソーニャがますます調子に乗つてクネクネ身悶えている。不意にソーニャが声にならない悲鳴を上げる。シスターに捕まえられている。

「カーチヤ。ソーニャとあつちで遊んであげなさい。」「わ~い。」

先ほどの女の子はソーニャを両手で掴むと駆けだしていった。ソーニャの口が『助けて』と動いた気がした。数人の子供たちが元気に走り去っていく。

「さて、静かになつたわね。」

シスターは笑顔を見せる。子供を何人も育ててきた逞しさだろうか。最初の優しい印象とは別に強さを感じる。

「クレア、怪我は大丈夫だつたの?」

ナスター・シャは、私の手を心配しているようだ。手の怪我は完治していた。治癒の魔法のおかげで傷が残ることもなかつた。私としては破れてしまつた服の方がショックだつた。

「大丈夫よ。ほら、このとおり。あなたの方こそ目を覚まさなくて心配していたのよ。」

ナスター・シャが表情が変わる。安心した表情。すこし照れたような

表情。本当に分かりやすい。

「ナスター・シャ。クレアさんは長旅で疲れているだろうから。客間で休んでもらつたらどうかしら。客間と言つても何もない所で悪いけれど。」

「いえ、シスター。私はすぐに立ちますので。このままで用件だけを。シスターにも聞いてもらえると助かります。」

ナスター・シャが一瞬、残念そうな表情を浮かべ笑顔をこちらに向ける。

「ナスター・シャ。貴女にスクールへ入つて欲しいの。」「え？」

ナスター・シャは困惑した表情を見せる。

「現状では魔法が使える者は、スクールに入るか監視下に置かれるのがほとんどなのよ。貴女はスクールに入れる年齢だし、素質もあるわ。あっちでの家はスクール側で用意する。ただ、危険な仕事で命を落とすこともあるから入らなくてもいい。どうかしら。」「入りたい。けれど・・・。」

ナスター・シャはシスターの方を見ている。シスターはため息をつく。「行つてきなさい。子供たちのことなら心配いらないわ。自分たちでいろいろ出来る歳になつたわ。スクールで頑張つて稼いできなさい。そして、ここに送つて来るのよ。イワンなんて最初だけよ。あの変な妖精を寄こしたきり音沙汰ないんだから。」

シスターが豪快に笑つている。

「うん。ありがとうシスター。」

「決まつたわね。私からスクールに伝えておくから、数日したらスクールから正式な書類が届くと思うわ。字は読めるかしら」「読むのは大丈夫よ。書くのは苦手だけど。」

「わかつたわ。一応、説明する人間をつけておくわ。詳しきはその人に聞いてちょうだい。」

ナスター・シャが即決すると思つていなかつた。断つてほしいという思いもあつた。しかし、ナスター・シャはスクールへ入ることを決め

てくれたのだ。嬉しいと思うことにした。

「ナスター・シャ。貴女、スクールへ入つたら私と一緒に仕事しない。破れた服と火炎石の分、貸しがあるのよ。」

「わかつたわ。クレア。よろしく。」

冗談で言つたつもりだったが、ナスター・シャは嬉しそうな顔で約束してくれた。それから、しばらく話をした。ソーニヤの悲鳴が聞こえる。ナスター・シャと目が合う。笑う。こんなに心の底から笑うのは初めてだった。太陽が眩しい。雲ひとつない空だった。

0章 完

〇章・6（後書き）

ソーニャ「これって、クレアは死んでいて。幽霊って落ち込みね。」

ドゥーニャ「あきらが、セクシー要員を殺すわけないじゃない。」

ソーニャ「だつて、小説のタイトルがアレよ。絶対、死んでるって
ドゥーニャ「あなた、本当にクレアに嫉妬しているのね。まあ、胸
とかあなたには・・・」

ソーニャ「いいのよ。私は可憐な要員なんだから・・・あきら、可

愛して要員でいいのよね？いいのよね？」

今日、何度目かのため息をつく。

お父様から呼び出しがあった。縁談の件だ。そう確信していた。幼いころからポワチエ家に嫁ぐことが、メディシスとポワチエの両家の間で決まっていた。私も今年で13になる。民を守るのは貴族の役目。そう言って、スクールに入れさせてもらつた。実のところ、名家のポワチエ家に嫁ぐしかないという運命から逃げていただけなのかもしれない。

「フィリア様、馬車の用意ができます。お急ぎください。」ドアをノックする音に続きジェラールの声が聞こえる。ジェラールは代々メディシス家に仕える騎士の家系で、私より一つ歳が上だつた。昔は、兄のように思つていた。

「今、行きます。」

悩んでも仕方がない。ロザリオを首にかけて部屋を出た。

馬車は貴族の屋敷が並ぶ北東地区から南門へと進む。ユーサイキアはスクールを中心に栄えていた。スクールを見るのも最後になるかもしれない。そう思いスクールを見て回れるようにジェラールに頼んでいた。ジェラールは馬車の前を白馬に乗りゆつくりと駆けていた。馬車は別の従者に任せてある。鐘の音が聞こえる。小鳥が青空を飛んでいく。スクールの中にそびえ立つ礼拝堂からだ。2年間、祈りを捧げてきた場所だった。ロザリオを握りしめる。心が落ち着いた。

馬車が方向を変えた。賑やかな声が聞こえてくる。南門から中央に伸びる大通りは店が立ち並び賑やかだ。窓から見える人々の表情は明るい。スクールがあるこのユーサイキアではモンスターに怯えることはない。しかし、自衛手段の無い小さな町や村は襲われることが度々あつた。スクールの活動の一つはそういう町や村を守ることだ。そして、最近モンスターの活動が活発化している。

南門へ付いたようだ。馬車が止まつた。ジョラールは守衛と話をしている。一人の少女が門を通りてきた。立ち止り辺りを見渡す。驚いている表情が面白い。瞳も口も全開にしている。この街へ来るのは初めてなのだろう。可愛らしい容姿に反して背中に槍のようなものを背負っている。よく見ると槍にしては少し短い。杖なのだろう。ということは、あの少女もスクールに入るのか。この時期に入つて来るということは既に魔法が使えるのだろう。ほとんどの者は決められた時期に入る。時々、魔法が使える人材がスカウトされ遅れて入つて来ることがあった。とは言つても、スクールが有名になつてからはあまりいなかつた。

「きやつ」

氣付くと少女が倒れていた。こちらに向かつて男が走つて来る。手に小さな袋を持っている。

「セバスチャン。ちょっと、待つていて。」

私は馬車から飛び降りた。セバスチャンの慌てふためく声が聞こえる。男を止めようと構えたその時だつた。男の足に蔓が絡まる。男はそのまま倒れた。手に持つていた小袋が私の足元に落ちた。

「おりや～。」

迫力のある女の子の声だ。立ちあがろうとした男が派手に転げた。所の周りを小さな妖精が飛びまわつてゐる。あれが声の主のようだ。頭の上にピヨッコつと出た髪の毛が角のように見える。

「ソーニャ。待つて、やり過ぎだよ。」

さつきの少女が妖精を止めつてゐる。

「「ごめんなさい。大丈夫でしたか？」

少女が男に手を差し伸べる。男はその手を払いのけた。

「くそ、なんだこの虫。覚えてろよ。」

男はそう言い捨てると走つて逃げていく。

「む、虫。誰が虫だ～。」

妖精が追いかけてく。少し離れた所で飛び蹴りをくらつた男が吹っ飛んだ。

私は足元に落ちていた小袋を拾つた。見かけより重い。中は精霊石だ。スクールに入る時の身分証明書のようなものだ。

「そここの貴女、これは貴女のかしら」

少女が駆けつて寄つて来て、頭を勢い良く下げる。

「ありがとうございます。よかつた。それがないと、私は息を切らしながら、話そうとする少女を手で制した。

「気をつけなさい。精霊石は高価なものだから、先ほどのよつな輩に狙われたら大変よ。それにちょっと眼立ち過ぎたかしら」私は微笑んで、目線を周囲に向けた。野次馬が集まっている。主に目立っていたのは妖精の方だが。

「あなた、名前は？」

「ナスター・シャです。」

「そう。ナスター・シャ。私はフィリアよ。」

「フィリア様。」

ジェラールが駆けてきた。

「どうなさいました？」

「なんでもないわ。さあ、行きましょう。またね。ナスター・シャ。」「は、はい」

馬車の方でセバスチャンが安堵の表情を浮かべている。

「お嬢様。爺は寿命が縮まりましたぞ。」

「うふふつ。ごめんなさい。セバスチャン。」

セバスチャンの顔が弛む。

「なんかすつきりしたご様子で。爺は嬉しうござります。」

知らない間に心配をかけていたようだ。ジェラールの表情も屋敷を出る前より明るく見える。

「くそ、次会つた時は息の根を止めてやるわ。」

ソーニャと呼ばれていた妖精が戻つてきていた。まだ、怒りは収まつていよいよだ。ナスター・シャはソーニャをなだめている。

「可愛い子でしたね。フィリア様の小さい頃を思い出しました。8

年くらい前でしょうか」

8年前といふジエラールの事を兄さんと呼んでいたんだ。思い出
して顔が少し熱くなる。ちらりと、隣のジエラールを見上げる。い
つから兄さんと呼ばなくなつたのか。あの頃に戻りたい。

「決めたわ。お父様と話をするわ。さあ、ジエラール。行きましょ
う。」

礼拝堂の鐘の音が聞こえる。小鳥が飛んでいく。どいまでも。

1章・1（後書き）

ソーニャ「ひとつづく1章に突入よ。きっと、これから本格的に物語が進んでいくのよ。」

ドゥーニャ「まあ、あなたは”虫”扱いされていただけだけね。」

ソーニャ「ホント、私の扱いがだんだん酷くなつてきてない?ところで、ドゥーニャ。私たちって、今は離れているところにいるけれど、会話していいのかしら?」

ドゥーニャ「いいのよ。私たちの章でも離れた所で連絡してたじゃない。私、本編じゃ出番が無いからここで目立つわ。再登場の時に

”誰?”って言われるのだけは嫌なのよ。」

ソーニャ「わかったわ。一緒に次話からネタばれして行くのよね。じゅ、じゅ、」

ソーニャ&ドゥーニャ「また、来週~」

ラウンドストーンというパブを探しながら通りを歩いていた。このユーサイキアでお世話になる場所だ。ラウンドストーンを見つけるには苦労していた。街は広いし、人が多い。ストの村とは比較にならない。身長が低いので周りの人で建物が見えない。それに、文字を読むのもあまり慣れていないかった。看板の文字を読むために立ち止りながら移動していた。ソーニャは虫扱いされた怒りよりも好奇心が勝ったのか辺りをきょろきょろ見ている。

「ナスター・シャ。」

不意に名を呼ばれた。振り向くと知らない女性がそこにいた。

「やつぱり。私はアン。ラウンドストーンの定員さ。店長に言われて迎えにきたよ。」

この時、私にはアンが女神のように見えた。知らない街でかなりの時間を迷い歩いていたからだ。

「ありがとうございます。でも、どうして私がナスター・シャだとわかつたの？」

「さつき、あんた達、南門の所でひと騒動あつたらしいじゃないか。店の客が話していたんだ。アホみたいな妖精を連れた女の子が賊に襲われたのをメディア家のお嬢様が助けたってね。それを聞いた店長が嫌な予感がするから迎えに行くように言つたってわけさ。まあ、妖精を連れている人間なんて滅多にいないからね。」

メディア家のお嬢様というのがフイリアのことみたいだ。実際に、あの男の人を倒したのはソーニャだけど、フイリアが助けたことになっているようだ。

「ちょっと、おばさん。誰がアホみたいな妖精なのよ。」

ソーニャはそう言い放つた途端、顔を思いっきり掴まれていた。

「誰が、おばさんだ。私はまだ10代だ。今度、おばさんって言いやがったら、その頭に咲いているアホみたいな髪をムシリとつてや

るから覚えてな。」

「え？」

私は10代と聞いて思わず声が出てしまった。アンが鬼のような形相でこちらを見た。血の気が引く。私は慌てて誤魔化そうとした。

「いいかい？」

アンがソーニャに念を押している。ソーニャは肩を震わせながら、顔を縦に振る。それを見てアンが手を話した。表情も元に戻つたようだ。

「だいたい、アホみたいな妖精と言つてたのは客だよ。どつせ、なんかやらかしたんだろ？」

「あはは。」

ソーニャが男の人を執拗に追い回していたのを思い出して、私は笑うしかなかつた。

「まあ、立ち話もなんだから。早くラウンドストーンに行きましょう。」

ラウンドストーンは南門の通りから1本離れた通りにあつた。入口に木の看板がかかっている。移動している間、ソーニャは頃垂れていた。よほど恐ろしかつたのだろう。私を案内してくれた女神のような人は絶対に怒らせてはいけない。それだけは心に刻み込んだ

「クリード。連れて來たよ。」

「ああ、遅かつたね。」

「なかなか見つからなくてね。」

店の中は木のテーブルがいくつか並んでいて、数人の男の人たちが賑やかに食事をしていた。店の中を見渡していると、カウンターの奥からクリードと呼ばれた男の人があ手招きする。アンは既に別の客の相手をしていた。

「ナスター・シャだね。僕はクリードだ。この店のマスターをやっている。まあ、細かい話しの前に何か食べるかい？」

答える前に、お腹が空腹を訴えていた。街の中を長い間迷つていたのだ。それに奥から良い香りがしている。お腹の大合唱に顔が熱く

なる。

「良い返事だ。そこに座つて、待つて。ソーニャも食事はするんだつたかな？」

ソーニャは目を輝かせて頭を何度も振った。ソーニャもお腹が減っていたようだ。クリードは笑顔を見せた。鍋を火にかけたようだ。良い香りがさらに広がる。ソーニャは嬉しさを全身で表現している。私も口元が自然と綻ぶ。ふと、厨房の方へ向かう影が見えた。身長は1メートルくらいで、茶色い服をすっぽり被っている。手には食器を抱えている。

「お、テキさん。これカウンターの女の子に頼むよ。」

奥からクリードの声が聞こえる。テキさんはゆっくりと運んできてくれた。野菜がたくさん入ったスープとパンだ。ソーニャにも小さい器で同じものが用意されていた。

「ありがとう。テキさん？」

テキさんは何事もなかつたように仕事に戻つて行つた。

「ブラウニーのテキさんだ。珍しいだろ。って、ソーニャを見慣れているナスター・シャには珍しくなかつたか。おつと、冷える前に食べてくれ。」

「はい。いただきます。」

大きく切つてある野菜を口に頬張る。

「美味しい。」

思わず声がでた。クリードは微笑んでいる。

「ん。スープは美味しいわね。パンの方はいまいちかしら。」
いつの間にか、ソーニャは食べ終わっている。

「ははは、ソーニャは厳しいな。」

クリードは苦笑している。

「ん? なんであんた私の名前知つてんのよ。」

「そうか、覚えてないか。君が生まれた時、僕も側にいたんだけどな。イワンからは何も・・・聞いてないか。」

「ふうん。覚えてない・・・わね。」

ソーニャのフォークが私のスープから野菜を浚つていぐ。

「あ～、私の・・・」

話の方に気を取られていた私は、成す術もなくソーニャの口に消えていく野菜に涙を呑んだ。ソーニャの小さいからだの中のどこに収まるのか。本当に妖精なのか疑いたくなるほど食い意地が張つている。

「客もひと段落したようだし、少し話をしようつか。」

そう言いながら、クリードはコップにミルクを注ぎ店の端つこの席に置いた。他のテーブルの客は食事は終わり談笑しているという感じだ。

「私も、私も」

ソーニャは大きく手を振つてゐる。飛んでいることが多いソーニャが座つてゐる。ミルクが入る余裕があるのか心配になるほどだ。相当こここの食事が気に入つたのだろう。クリードは一つコップを出してくれた。

「ありがとう。クリードさん」

「ミルクも美味しいわね。」

ソーニャは大きくなつたお腹をさすりながら満足そうだ。いつのまにか店の端の席にテキさんが座り、ミルクを飲んでいた。

1章・2（後書き）

ドゥーニャ「ソーニャ、あなた、今回、食べてだけじゃない。」
ソーニャ「怒つたり、悲しんだりでお腹が減ったのよ。それに、たくさん食べる女人を可愛いと思う男性は多いって、なんかの記事で読んだわ。」

ドゥーニャ「それは、限度があると想うわ。まあ、あなたの本体が引っ張かれなくてよかつたわ。」

ソーニャ「え？私の本体って、この髪の毛なの？」

ドゥーニャ「そうよ。あなたの本体はそのアホ毛よ。ちなみに私は額にある逆三角形の紋章よ。」

ソーニャ「ちよっと、なに？ドゥーニャ、あなたの章でそんな外見について触れられてないじゃない。」

ドゥーニャ「いいのよ。言つたもん勝ちなんだから。あきらも良いつて言つてゐる、あきらの気が変わらないつか今回のお書き終わるわよ。」

ソーニャ「ずるい。ドゥーニャ、私の設定も変えてつたら～

「うううそうさま。クリードさん。」

本当に美味しかった。それに温かい。ミルクの最後の一滴まで飲み干した。ソーニャはウトウトしている。太って飛べなくなるソーニャの姿を想像する。それそれで可愛いかもしれない。

「スクールの方から説明するように頼まれているけど、どこから話そうか。そうだね。まずは僕とこの店のことから。僕はイワンとスクールの研究科の仲間だったんだ。」

イワン兄さんはソーニャとドゥーニャのマスターだ。それにストの村の孤児院を出てスクールに入ったことは知っていた。ただ、それ以外のことはうまく思い出せない。何故かイワン兄さんのことは記憶が曖昧だつた。それに研究科というのは初めて聞いた。クレアからは聞いていない。

「あー、研究科というのはスクールで魔法について研究をしているところなんだ。僕は見てのとおり体力はあんまりだからね。今はいろいろあつて、このパブ、ラウンドストーンを営んでいるわけさ。イワンの友人ということで、きみの当面の面倒を見るようにスクールから頼まれたわけだ。それにこのパブは仕事の依頼とかも扱つているからね。夜は少し騒がしくなるけど、こここの3階の部屋を使ってもらつて大丈夫だから。ちなみに、隣の部屋はアンが住んでるからユーサイキアー安全だよ。それから、食事の方は僕の料理もついてるからね。」

クリードが微笑む。ソーニャが喜びそうな話しだが、ソーニャは夢の中で食事中のようだ。

「スクールにいる間は住む場所と食事は、保障されている。その分、スクールでの活動は命をかけることになるけど。きみにはソーニャが付いているから大丈夫かな・・・？」

眠っているソーニャを見ながらクリードが肩を竦める。

「なになに？ イワーンがロリコンって話？ わざわざソーニャを付けているんだもんね」

アンが器を下げながら、横やりを入れる。ソーニャが側にいるのが当たり前になっていたが、本来はイワーン兄さんのところにいるのが普通なのだろう。

「でも、イワーン達と一緒に過ごしてたら、ソーニャが欲求不満でおかしくなっちゃうわね。」

言いたいことを言つてアンは接客に戻る。テキさんはいつの間にかいない。奥で食器を洗う音が聞こえる。

「えーと、話しを戻すよ。スクールでは通常、最初の半年で基礎訓練をすることになっているんだけど、ナスター・シャの場合は初めてから魔法を使えるから別訓練になる。たぶん、他のスカウトされてきた人たちと一緒に訓練するはずだよ。ナスター・シャのようにスカウトされてきた人間には魔法の使いかたは教えないんだよ。初めから使えるなら、それが本人にあつた使いかただろうからね。それで、ある程度、戦える力があると認められるとランクづけされる。その後は、独自に魔法を習得するなり、実践に出るなり、各自の判断で行動してもらつて大丈夫さ。まあ、各自でといつても、一人でといふわけにはいかないだろうから、このパブみたいな仕事を紹介する場所がいくつかあるんだよ。それについては訓練が終わつたら、その時に説明するよ。ここまで大丈夫かな？」

クリードは、優しい口調で説明してくれた。伝わったかどうか不安なのか、顔を覗き込んでくる。

「ふあ～」

いつの間にか、隣に座つていたアンが大きく欠伸をした。

「眠くなる話だわ。そんな話しさスクールに行つてたら、そのうちわかるわよ。それより、部屋に案内してあげるわ。さあ、行きましょ～。」

アンが手を引く。

「ちょっと、まだ、説明が。まあ、いいか。明日は朝からスクール

へ行くから早く休むといいよ。学長のカウス老の所までは案内するから。だから明日はアンも朝から頼むよ。」

アンは軽く手を振つてクリードに返事をする。店の裏口へ回り、階段を上る。2階はクリードが使つてゐるようだ。3階はアンと私が、そして4階。というより屋根裏にはテキさん家族が住んでいるらしい。ただし、屋根裏へ立ち入つてはいけないというルールがあるようだ。あと、夜にはアンの部屋にも立ち入つてはいけない。アンは2度、強調してそう言つてゐた。ともかく、コーサイキアについての一日目は早めに休むことにした。私に与えられた部屋はベッドとテーブルがあるだけで、今は他に何もない。部屋は綺麗に掃除されていた。きっと、クリードが準備してくれたのだろう。精靈石をテーブルの上に置く。杖はベッドの近くの壁に立てかけた。ストの村から持つてきたのは、イワン兄さんが使つていた杖と、スクールから送られていた精靈石だけだった。シーツから陽の香りがする。新しい生活が始まった。まだ、何もない。それでも、クリードとアンは優しそうだし、ソーニャが付いてきてくれた。そういうえば、ソーニャは下に寝たままだ。気ままなソーニャは好きなところで寝る方があつてゐる。そう思つた私は、疲れていたこともあって、そのまま眠つてしまつた。

1章・3（後書き）

新しい生活に浮き足りだっていたのだろうか。

私は後悔することになる。

なぜ、あの時、ソーニャを置いて行ったのか。

これが、今生の別れになるとも知らずに。

ソーニャ「ちよつと、ドゥーニャ。変なナレーションつけないでよね。」

ドゥーニャ「えつ。ダメ？」

ソーニャ「これじゃ、私がいなくなつちゃうみたいじゃないの。」

ドゥーニャ「大丈夫よ。あなたがいなくなつたら、私の出番が増えかかる。」

ソーニャ「大丈夫じゃないわよ。もう、油断できないわね。ヒロインの座は譲る気ないわよ。」

ドゥーニャ「普ッ。ヒロインですつて。あなた、どう見ても道化じやない。食べて、寝て、太つて。飛べない妖精は・・・って言われるのよ。」

ソーニャ「キー、見てなさいよ。ここから私の魅力全開なんだから。」

ドゥーニャ「どうかしら、この後書きの「一ナーハネタばれなんだから、あなたの登場もここまでよ。」

ソーニャ「そんなことないわよ。次も出るんだから。絶対、あなたには譲らないわ。」

小鳥の鳴き声が聞こえる。勢いよく窓を開ける。朝日が気持ちいい。

「もう、朝なの？」

ソーニャは眠そうな声だ。それにどことなく不機嫌そうな表情だ。

「おはようソーニャ。今日はスクールに行く日だから、早く支度しないで。」

まだ、眠そうなソーニャを連れて階段を下りる。

「おはよう。よく眠れたかい？」

1階に降りるとクリードが朝食の準備をしていた。

「おはようございます。クリードさん。ぐっすり眠れました。」

「それはよかったです。ソーニャの方は眠れなかつたのかい？ やっぱり、店の声が気になるかい？」

そういうえば、店の方は夜までやつているのだった。昨夜は疲れていたからかまったく気付かなかつた。

「違うわよ。下じやなくて、隣よ。隣。上で寝なおすとしたら、すごい音が聞こえるんだもん。」

「あはは、アンは寝ぞうが悪いからね。夜は気をつけないと。それとお酒を飲んだ時も注意した方がいいね。」

「酔うとひつかく？」

「いや。」

「かみつく？」

「いや。もつとす」。

「あれより・・・。命がいくらあっても足りないわね。」

ソーニャが青ざめている。昨夜は何があつたのだろうか。昨日はみんなに美味しいそうに食べていた食事も、今朝は上の空だ。ときどき、何かを思い出しフルフル震えている。

「さて、そろそろ出掛けようか。僕も、カウス老に仕事の話があるからね。精霊石は忘れちゃダメだよ。」

「はい。」

「じゃ、テキさん。行ってくるから後のことは頼むよ。アンが起きるのは昼ぐらいだろうから。」

テキさんが任せろと言わんばかりの顔で見送る。テキさんに軽く手を振りクリードの後を追う。今度はソーニャもりやんと付いてきている。

南門の大通りに出て街の中心へ向かつ。中心に高い建物が見える。天にまで届きそうな高さだ。クリードの話では、その建物を中心には堀が円を描いているらしい。その堀の内側に入るために精霊石が必要ということだった。

ラウンドストーンを出てかなり歩いた。ソーニャは空を見上げている。

「建物が見えたから、もっと近いかと思つていたわ。」

ソーニャの意見に同意だつた。コーサイキアの街はかなり広い。初めてきた時は僕も驚いたよ。他の街と比べるとかなり広いし、みんなに高い建物は見たことなかつたからね。まあ、ずっと、南に行くともつと大きな街もあるみたいだけじね。高さだけなら世界一さ」

クリードが自慢げに話して、上を見上げた。私も建物の先を見上げる。そのまま、後ろに倒れそつた高さだ。

「上まで、登れるんですか？」

「ん？ 登れるよ。何回か月の観測で登つたからね。二つの円に手が届きそうな感じだつたよ。」

「本当ですか！ 登つてみたまへ。ねえ、ソーニャ。」

「私は嫌よ。あんな高いところまで登るなんて大変そうじやない。」

「え〜。」

私は肩を落とす。ソーニャは通りの両側に並ぶお店の方に興味があるようだ。

「大丈夫だよ。中に魔力で上がる昇降機があるから簡単に行けるさ。最上階まで上がるとかなり魔力を使っちゃうけど。いつか、一緒に

行こうか？」

「やつたー。クリードさん。約束ですよ。」

クリードの顔を見上げる。

「ああ。」

クリードが少し間を開けて横を向いて答えた。

「あら？ クリード、なに赤面しちゃってるの？ それに、一人だけで楽しむつもりのようね。アンに報告しないといけないわ。」

ソーニャが笑っている。なんか、とても楽しそうだ。

「やだな。ソーニャ。その時は、ソーニャもアンも一緒に行こうよ。あ、でも、上は寒いし、風も強いから気をつけないとダメだよ。」

「そうやって、邪魔者は来るなってことね。」

「まいっただな～。」

クリードは頭に手をやっている。ソーニャの羽の動きがいつもより早い。今朝は元気がなかつたのが嘘のようだ。やはり、ソーニャは元気な方が可愛い。ソーニャはスクールの入り口までクリードをからかい続けていた。

1章・4（後書き）

ソーニャ「ドゥーニャ。あの中央の高い建物だけど、どういつ？」

ドゥーニャ「きつと、いるわね。」

ソーニャ「そうよね。絶対いるわよね。」

ドゥーニャ「あれだけ高いんだもの。ここに違いないわ

ソーニャ「やつぱ、最上階にいるんだわ。ラスボスが

ドゥーニャ「途中に伝説の武器とかあるのよ。」

ソーニャ「それに、半分くらいのぼったら因縁の相手とじか出でてくる

のよね」

ドゥーニャ「でも、登るの大変そうね。」

ソーニャ「そうね。高いところはあまり好きじゃないわ。風が強い
らじこじ。」

ドゥーニャ「じゃあ、倒しちゃえばいいんじゃない」

ソーニャ「そうね。そうすれば、ラスボスも一発ね。」

ドゥーニャ「一階部分の南側を壊しちゃえば、通りの上に倒れるか
ら、損害も少なそうね。」

ソーニャ「これで、この小説も終りね。1章で無事完結だわ。」

ドゥーニャ「次週からまた、ドゥーニャと愉快な仲間たちの冒険が始
まるわよ~」

ソーニャ「え？あなたが主役！？」

ドゥーニャ「言った者が勝ちですわよ。おほほほ~」

「さあ、あそこがカウス老の部屋だよ。」

「てっきり、あの高い建物の最上階にいるのかと思ったわ。」

案内された部屋は、スクールの入り口からまっすぐ伸びた建物の1階にあつた。見たところ他に並んでいる部屋と違いはなかつた。強いて言えば、ドアに名前が書かれているくらいだ。それも、上から貼つただけで、後から付け足した感じだ。

「カウス老も歳だからね。あまり高いところは移動が大変だろ?」

ソーニャは納得した顔で頷いている。クリードは微笑むとドアを2回ノックした。

「開いとるよ。」

部屋の中から低い穏やかな声が聞こえた。クリードがドアを開け、一礼して中に入った。

「失礼します。クリードです。ナスター・シャを連れてまいりました。」

クリードの後に続いて部屋の中に入る。部屋の奥の机には本が山積みされていた。その本の横から白い髪と髭の老人が顔を出す。この人がカウス老なのだろう。スクールで一番偉い人と聞いていたが普通のおじいさんに見える。カウス老はクリードの顔を見て、少し間を置いて満面の笑顔になった。

「おー、クリード君。よくきててくれたね。そして、きみがナスター・シャ君か。初めてまして。クレア君から聞いた通りの可愛い子だ。あと、ソーニャ君だね。以前、イワン君と一緒に会ったのかな。まあまた、座りなさい。」

カウス老は立ち上がり、出迎えてくれた。挨拶をしながら、私の顔とソーニャを交互に見て微笑むと、手前の長椅子へ座させてくれた。そしてお茶を淹れはじめたようだ。部屋の中は雑然としていた。とにかく物に溢れていた。古そうなものから新しいものまで部屋の両

側に並んでいる。ソーニャも部屋の中に置いてある物が気になつてゐるようだ。

「「」にある物つて高いのかな。一つぐらいもあつても、わからなによね。」

ソーニャが耳元で囁く。思わず苦笑する。

「なんじや、ソーニャ君。わしの研究に興味があるのかね。クリード君の使い魔だけあるね。」

カウス老はお茶をテーブルに4つ置いた。とても嬉しそうな顔をしている。」

「先生。ソーニャはイワンの使い魔ですよ。」

クリードはそう言つと、お茶を一口飲んだ。私もお茶に口にする。初めて飲む味だった。

「ん？ そうじやつたな。クリード君に使い魔がいたら、さぞかし研究熱心な使い魔なんじやろうな。」

カウス老は笑いながら髪を撫でる。それにしても、ソーニャの性格はイワン兄さんから来ているのだろうか。やはり、イワン兄さんの事をはつきりと思い出せないでいた。

「先生。まずは、ナスター・シャの精霊石を交換しないと。ナスター・シャ。精霊石はあるかい？」

「おー、そうじやな。フム。確かにこの辺に」

カウス老は透明な宝石をテーブルの上に置いた。手の爪ほどの大きさだ。私が持ってきた精霊石はクリードの前の方に置いた。

「最近、良い精霊石が手に入らなくてね。でも、運がよかつた。小さいが純度は高い良物じや。では、ナスター・シャ君。この精霊石を持つて、魔法を使う要領で精霊石の中に魔力を注ぎこんでくれんか。

」

私は頷き、渡された精霊石を両手で握り、手の中に意識を集中した。手を広げ、手の上の精霊石を見る。これと言つた変化は何もなかつた。

「ちょっと、貸してくれんかの。魔力は入つておるよつじやが、透

明なままじやな。普通は色が変わつたりするものじゃが。こっちの精靈石でも試してくれんかの。」

クリードの前に置いていた精靈石を受け取ると、同じよう口意識を集中する。その時、ピシッといつ音が聞こえた。手を開き、恐る恐る精靈石を確認する。縦に大きくヒビが入っていた。

「あ～。」

覗き込んだソーニャが低い声をあげる。

「ごめんなさい。」

私は悲鳴に近い声をあげ謝つた。

「な～に、謝る必要はない。元々、純度が低い精靈石を渡しておるから。しかし、割れおつたか。」

カウス老は受け取るいろんな方向から精靈石を観察している。

「大丈夫だよ。ナスター・シャ。先生は良い実験材料が手に入つて嬉しそうだから。」

クリードはカウス老の様子を見て笑顔で言つた。確かにカウス老の顔は嬉々としている。クリードは小さい方の精靈石を入れ物に入れると渡してくれた。

「これは無くしたらダメだからね。先生。話の続きをお願ひします。」

「おつと、すまん。すまん。」

カウス老は割れた精靈石を大事そうにしまうとスクールについて語り始めた。スクールについての説明が終わつても話は続いた。お茶はある地方の一級品だとか、自分の研究だとか。途中から知らない言葉がたくさん出てきて、内容はわからなかつた。そもそも、物心ついた時からストの村の外を出た記憶が無い。村での事しか知らないかった。ヨーサイキアについてからは驚かされる事ばかりだ。クリードは熱心に話を聞いている。ソーニャは眠そうな顔だ。私はもらつた精靈石に目をやつた。その透明な精靈石は見ていると吸い込まれてしまいそうだった。

1章・5（後書き）

ソーニャ「ドゥーニャ。大変よ。作者が小説を書く暇が無いとまず
いているらしいわ。今回の小説も適当に書いて、読み返すことでも
きなかつたらしいわ。」

「

ドゥーニャ「なによ。いくら師走とはいえ、書く暇がないわけない
じゃない。そんな事言つてこる暇があつたら手を動かせばいいのよ。」

「

ソーニャ「本当にね。食事をする暇だって、寝る暇だってあるんだ
もんね。」

ドゥーニャ「息をする暇があるつゝせ、言い訳は許さない。私の再
登場までは死んでも書かせてみせるわ。」

起き上り背伸びをする。今日は身体が軽い。ちゃんとした所で寝るのは久しぶりだ。ヨーサイキアに自分の部屋に帰つて来たのは昨日の陽が落ちてからだつた。私はナスター・シャをスクールに推薦した後、ベルゼブブについて調査を続けていた。あの時に見た神官の姿をしたゴブリン。あいつが死ぬ時に使つたドクロ。ベルゼブブに繋がる情報が欲しかつた。何でもいいから手掛かりが求め、ここ一体のゴブリン達の住みかを探つたがゴブリンの姿はなかつた。この辺りにいたゴブリンは全てあの戦いに動員されていたのだろうか。しかし、あそこまで統率された動きの軍だつたのだ。長い期間をかけて準備をしたに違ひない。そんな事がゴブリンに可能なのだろうか。疑問ばかりが浮かぶ。神官姿の「ゴブリンから聞き出せればよかつたのだが、あのゴブリンはドゥーニャが首を刎ねてしまつた。戦場に戻つても、あのドクロどころか、ゴブリンの肉片すら残つていなかつた。あるのは私の魔法の跡が大地に刻まれているだけだつた。残る手掛かりはソーニャとドゥーニャしかいない。あの2体は何か知つてゐるはずだ。しかし、ソーニャとドゥーニャが簡単に教えるとは思わなかつた。それに、私は彼女らのことを好きになれなかつた。ゴブリンを惨殺していくドゥーニャの姿は思い出すだけでも、背筋が冷たくなる。救いなのは、ソーニャが数日前からナスター・シャと一緒にユーサイキアに来ていることだ。聞き出す機会はあるはずだ。ナスター・シャの様子を見に行くついでに探しを入れる。

私は着替えると、ナスター・シャがここユーサイキアで世話になつてゐるラウンドストーンへ向かつた。ラウンドストーンへは、食事以外にも仕事の依頼があるか確認に行く。スクールへの公式の依頼でないものもある。独りで行動する私には、公式の依頼を受けられることは少ない。ラウンドストーンで非公式の仕事を取る方が多かつた。

ラウンドストーンに着くと軽い食事を取つた。こここのマスターは、小柄で華奢な男だ。声が小さく頼りない。必要以上のことは話さない。独特の存在感だ。だが、この余計なことを話さない男が喰むラウンドストーンの雰囲気は好きだつた。なにより、料理は美味しい。

「あら？ クレアちゃん。久しぶり。」

「お久しぶりです。アンさん。何か報酬の良い仕事はありませんか？」

仕事の依頼の確認は、口数の少ないマスターではなく。こここの自称看板娘のアンさんに聞くことが多かつた。もつとも、看板娘を担当に来る客はいない。

「そうね。ないわ。」

アンはきつぱりと答えた後に、頬に手を当てて、首をかしげた。

「この前のゴブリン達のおかげ、長期の防衛契約は増えているんだけど、そんなのスクールの方で希望者を募っちゃつてはいるし、クレアちゃんは、そんなの望んでいないでしょ？ そうだ。あのマスターを殺してくれたら私から報酬だすわよ。」

アンは笑いながら、マスターの方を見る。冗談に聞こえるが目が笑っていない。私もマスターの方を見る。マスターと目が合つた。今のは聞こえていたようだ。マスターはあまり表情には出さないが怒っているのがわかる。しかし、あの弱そうなマスターを殺すだけで金が手に入る。少し心が揺さぶられる。ベルゼブブ調査のため旅に出ていたので、手持ちの金がなかつた。それになんの結果も得られなかつたのだ。この簡単そうな仕事に飛びつきたくなる。

「アンさん。また、喧嘩したんですか？」

一瞬でも真剣に考えてしまつた自分の感情を誤魔化すよに質問をした。聞いてしまつた後、すぐに後悔した。

「クレアちゃん。聞いてくれる？ 私がこの前、ちょっと寝坊したら・・・・」

こんなところで、時間を使いたくなかった。しかし、アンの話を途中で止めるのは無理そつだ。そんな私の気持ちに追い打ちをか

けるようにマンの話し方に感情がこもっていく。

クリードを殺しますか？

「はい

「いいえ

ドゥーニヤ「はい。」

ソーニヤ「いいえ。」

ドゥーニヤ「あれ？ 答えが違つたわね。」

ソーニヤ「クリードがいないと食事に困るわ。絶対、アンは料理音痴だもの。」

ドゥーニヤ「そうね。あなたにひとつは切実な問題ね。私はクリードと戦つてみたいわ。」

ソーニヤ「あなた、本編で出番がないからって、ここで戦つのはやめてよね。」

ドゥーニヤ「いいじゃない。たぶん、ここで殺しても本編では生きているわよ。」

ソーニヤ「えへ、そういう問題なの。じゃあ、いいかなー。でも、ドゥーニヤが負けたら、ここにも登場しなくなるわよ。」

ドゥーニヤ「えつ？ 私たちつて負ける要素あるの？」

ソーニヤ「ううん。クリードは私たちの生き立ちを少しなりとも知つていてるみたいだし、予想外の展開もありえるかもよ。」

ドゥーニヤ「……。平和が一番よね～」

ソーニヤ「やうよな～」

中央の通りを北へ進んだ。

アンの話によるとナスター・シャは6組で訓練を受けているはずだ。予想した通りだった。ここスクールでは訓練の内容により組みを分けている。1組は一定以上の実力がある者達だ。それは魔法が使える、使えないに関係ない。私が知る限り1組に入るのは、王族か貴族だ。既に高い教育を受けている場合が多い。2組は貴族で魔法の素質がある者。3組は貴族で魔法の素質が無い者。4組は平民で魔法の素質がある者。5組は平民で魔法の素質が無い者だ。1組は実践訓練から、2・4組は魔法の基礎から訓練、3・5組は魔法対策から訓練が始まる。そして、ナスター・シャがいる6組に入るのは、奴隸や孤児を中心だ。ただ、異質な才能をもっている場合は貴族や平民でも入れられる。そして、それぞれに合った訓練が行われる。中には、初めから思わぬ実力を發揮する者もいる。もつとも、ここ数年は6組に入れられる人間は少ない。全体としてはスクールに入る人数は増えている。スクールが活躍の場が増えてからは魔法の素質がなくとも入つて来る者が多い。貴族はもちろんのこと、平民でもスクールに所属したことが一種のステータスになつているのだ。それでも、6組に入つてくる者は減つていた。

スクールの敷地内に入つていた。入口から中央の建物へ向かう。左側で訓練をしている集団がいた。視界の端で確認し、そのまま歩を進める。スクールの敷地の北西に向かつた。そこにはやや高い壁に囲まれた区画がある。まだ、そこで訓練をしている時期のはずだ。2年前の私もそうだつた。

扉を開ける。陽が直接入らないため薄暗い。外側は石畳で囲まれている。その上から出ないよう気をつけ、部屋の中央を視線を向ける。円形の魔法陣。中央に女が座している。6組の訓練を受け持つパトリシアだ。影の女王パトリシア。一流の呪術師でありながら、数々

の武芸を極めている。厳しき訓練から貴族はおろか平民の訓練からも外されたほどだ。

「クレア？ 何してんの？」

不意に横から声が聞こえた。特徴のある声。ソーニャだ。声のした右上を見る。石柱の上で寝ている。

「あなたを探していたのよ。聞きたいことがあるの。」

「私に？ ナスター・シャじゃなくて？ まあ、良いわよ。ナスター・シャが訓練中なんだけど、暇で、暇で。ほら、あそこに倒れてる。」ソーニャが手で示した方向を見ると、仰向けに倒れたナスター・シャがいた。他に一人倒れているのが見える。私たちの時と変わつてない。パトリシアの訓練内容は簡単だ。パトリシアを倒せばいい。パトリシアは中央で座して動かない。しかし、この訓練場一帯が彼女の魔法射程範囲内だ。

「ずっと、やられっぱなし何だもの。見てても面白くないし、中に入つたら私までやられちゃうでしょ。」

ソーニャは頬を膨らませている。

「あなたに、聞きたいのはベルゼブブのことよ。」

ソーニャの表情が変わる。ナスター・シャの方を見つめる。

「ソーニャ。あなた。あの日、ゴブリン達が来ることを知っていたわね？」

沈黙。ソーニャはナスター・シャの方を見つめたままだ。

「それに、ゴブリン達がベルゼブブを復活させる気だつたことも。ソーニャはゆっくりと目を閉じた。沈黙。

「あなた、それを知つていてナスター・シャを村から連れ出した。そして私に会わせた。私がベルゼブブと戦うことまで計算して。そうでしょう？」

私は自分の声が大きくなっていること驚いた。いつも平静を保つようになっていたのだが。やはり、ソーニャからの返事はない。視線をソーニャから外す。私は次の言葉を発しようとしたが、その前に心を落ちつけた。

「すぴー、すぴー。」

ソーニャの方を振り向く。ソーニャの頭が上下している。私は体中の血液が沸騰する音を聞いた。怒りが頂点に達した後、頭の温度が急激に冷めていく。叩き潰す。手を握りしめた。ソーニャがピクリと動く。私は深呼吸した。ソーニャのペースに乗せられるところだった。

「ソーニャ。下手な寝た振りは止めなさい。」「ぐー。」

気付いた時にはソーニャを叩いていた。短い悲鳴。すつきりした。

「クレア。酷い。それが人にものを尋ねる態度なの？」

ソーニャは大げさに痛がっているが無傷だった。無言で睨む。「は～。わかったわよ。最初に言つておくけど、私はあなたが知りたがつてているようなことは何も教えられないわよ。」

予想はしていた。そう簡単に教えるようなら苦労はない。

「まず、ベルゼブブのことだけど、何もしらないわ。だつて、私、産まれてから2年くらいしか経っていないもの。」

「でも、あの日、ゴブリン達が来ることは知つていたのよね？」

ソーニャが視線を逸らす。沈黙。それが答えなのだろう。

「じゃ、ゴブリンが持つていた髑髏はどうした？ナスター・シャガ打ち抜いた残骸があつたはずよ。あそこには何も残つていなかつた。」

ソーニャが立ち上がろうとしている。杖はパトリシアに奪われている。訓練場の方から音がした。ソーニャがそちらを向く。ナスター・シャガ立ち上がろうとしている。杖はパトリシアに奪われているようだ。杖があつたとしても攻撃に移れるかどうか。立つのがやつとだろう。ソーニャとの話しが中断してしまったが、ナスター・シャガ気になつた。ソーニャもそうだろう。ナスター・シャガは立つている。顔は傷だらけ。服はボロボロ。最初に会つた時の事を思い出した。あの時もあんな感じだつた。男の子かと思つたぐらいだ。ナスター・シャガの足が震えている。もう限界だ。それでも、パトリシアの魔法が来るはずだ。息をのむ。ナスター・シャガ一步下がる。間を置かず

ナスター・シャが立っていた所に黒い手が下から突き上げる。

「避けた。」

ソニー・ヤは身を乗り出して喜んでいる。私がソニー・ヤの方に気を取られた刹那、黒い手はナスター・シャの身体を払っていた。ナスター・シャの身体は吹っ飛んだ。思わずナスター・シャの方へ駆け寄りそうになる。

「あ〜、今日はもうダメみたいね。」

「ソニー・ヤ、さつきの話の続きだけど」

「ちょっと、待って。面白いものが見れるわよ。」

ナスター・シャが立っていたところに赤髪の男子がいた。パトリシアが放った黒い手を掴んでいる。奇声。食いちぎる。

「何？あの子。魔法を食べているの。」

「面白い子よね。初めて見た時はびっくりしたわ。お？もう一人も気がついたみたい。」

女の子だ。酷く瘦せている。パトリシアの方を睨んでいる。口が動いているのが分かる。何を言っているのかは聞き取れない。ようやくしながら、パトリシアに近づいている。何かに憑かれたような動き。2歩、3歩と進んだところで黒い手に捕まり崩れ落ちた。奇声。赤髪の男子が跳躍していた。パトリシアに届いた。パトリシアが身体をいなす。男子は壁に叩きつけられ、氣を失ったようだ。

「ね？面白い子たちでしょ。今日の訓練は終わりみたいね。まあ、暫くは起きないでしようけど。」

パトリシアは立ち上がり赤髪の男子と瘦せた女子を抱きあげた。こちらへ歩いてくる。

「クレア。生きていたのね。あなたは死に魅せられていると思ったのにな。」

「ええ。先生に鍛えられたお陰で。」

パトリシアは笑みを浮かべる。笑うと20代に見える。

「どう、久しぶりに立ち合つてみる？」

「遠慮しておきます。先生どこで戦うほど、命知らずじゃありま

せんから。」

2年前の仕返しをしたいところだが、影の女王相手に影に囲まれたここで戦うのは自殺行為だ。

「残念ね。じゃ、私はこの子たちを連れて帰るから、あの子はお願
いね。」

杖を渡された。ナスター・シャが使っていたものだ。パトリシアは軽く手を振つて去つて行つた。

「それにして、今日も酷くやられたもんね。今日はクレアがいるから楽で良いわ。」

ソーニャはナスター・シャの身体を突つついている。どうやら私が送つていくことが決定しているようだ。私はナスター・シャの身体を抱えた。軽い。顔を覗き込む。傷だらけだ。呼吸はしている。

「ほら。早く。ラウンドストーンまで行くわよ。ご飯。ご飯。」

ソーニャは先に飛んでいく。私はナスター・シャを抱え、後を追う。外は陽が落ちかけている。ぐつたりとしているナスター・シャの顔を見ると心配になつてくる。やはり、パトリシアの訓練は厳しい。それでも、今なら必要な訓練だと思える。ここで耐えられなくて死ぬならそれも運命なのだろう。少なくとも、生きたまま魔物に食べられたり、死ぬことも許されず玩ばれたりした連中よりはまともな死にかたができる。

「そうだ。クレア。」

スクールの出口でソーニャが振り向いた。

「ベルゼブブのことを知りたいなら慌てなくていいわ。あなたはもう逃げられないのだから。」

ソーニャは、私の顔をしばらく見ると口元に笑みを浮かべそのまま人混みへ消えて行つた。その笑みの真意はわからないがはつきりしたことがある。私はソーニャが大嫌いだ。

ソーニャ「あなたはもう逃げられないのだから。あなたはもう逃げられないのだから。」

ドゥーニャ「ソーニャ。わつきから何しているの？」

ソーニャ「ドゥーニャ。ドゥーニャ。このセリフカッコ良くない？」

あなたはもう逃げられないのだから。」

ドゥーニャ「あなた、からかうのは良いのだけど、不適切なセリフが多すぎるわよ。それじゃ、読者様が混乱するわ。」

ソーニャ「えへ、だつて。カッコいいでしょ。あなたはもう逃げられないのだから。」

ドゥーニャ「あ！」に手を当てるつてダメなもんはダメよ。田を見開いたつて駄目。」

ソーニャ「もひ、ドゥーニャつたら嫉妬しちゃつてへ。あなたの出番は本編には無いのだから。」

ドゥーニャ「あへ、駄目だわ。生きたまま玩ばれる妖精さんができそうだわ。」

ソーニャ「ちよつとい、まつ、足が動かなつ・・・」

ドゥーニャ「黙つていると可愛いわよ。ソーニャ。次は肘から下を落とすから、あら、気絶しちゃったのかしら。次話の更新までには直すから大丈夫よ。だからもうちよつとだけ。ね。」

ユーサイキアに戻った後、ジョラールはヤハチの街へ出かけて行つた。街の近くにオーラークが集団で出没しているという話だつた。中にはオーラークも混ざつてゐるらしく、ジョラールが所属する騎士団が出動することになった。

「ジョラールのことが心配ですかな、お嬢様。」

「別に心配なんかしてないわ。」

「そうですか、何か落ちつかない様子でしたので。」

セバスチャンはにっこり笑う。ジョラールの心配をすることはなかつた。騎士団の中でも1・2を争う剣の腕前だ。攻撃魔法も使う。愛用しているルーンソードは魔力を高める術式が刻み込まれている。オーラークの1匹、2匹に遅れを取る様な事はない。そう、心配はしていなかつた。

「もう、ジョラールまで私を子供扱いして。」

ジョラールにしつこく注意されたことを思い出した。いつまでも、心配し過ぎだ。ここには居ないジョラールへ不満をぶつける。この不満の元は、数日前に家に帰つてからだ。父も母も子供扱いばかり。貴族の娘だから、いざと言う時に民を守れないといけない。そう思つて、スクールに入ったのに。

「ダメね。」

ため息をつく。同じことばかり考えて抜け出せずにいる。

「セバスチャン。出かけてくるわ。」

「お嬢様。どうひらく。」「教会かしら。」

どこに行くか考えて無かつた。そういう時は自然と教会に行つてしまつ。

「そうですか。お気をつけて。」

ユーサイキアの街は明るい。ジョラールがヤハチの街へ出動したの

が嘘のようだ。自然と足が人の多い方へ向かった。市場だ。ジエラールがいると見て回れない場所だつた。人混みの中で頭より高い位置にソーニャが飛んでいるのが見える。近寄る。ソーニャの下にナスター・シャがいた。

「こんにちは。ナスター・シャ。」

「こんにちは。えーと、フィリアさん!」

ナスター・シャは以前会つた時と同じ笑顔を向けている。しかし、顔は傷だらけだつた。

「偶然ね。何をしているのかしら?」

偶然。いや、無意識のうちに探しっていたのだと思った。私が助けた少女と騒がしい妖精がラウンドストーンにいるという噂話しさセバスチャンから聞いていたのだ。騒がしい妖精ことソーニャが目立つので噂は広がつていて。もつとも、助けたといつのは誤解だつた。「今から、精霊石をアクセサリーにしてもらうところなんですが、M&Gというお店がどこにあるのかわからなくて?」

ナスター・シャは顔を赤らめてうつむいた。

「それなら、あそこにあるお店よ。」

ナスター・シャは看板をじーっと見ている。文字を読むのに慣れていないようだ。それに、この店の看板は読み難い字体だ。

「あ、本当だ。ありがとうございます。」

「どういたしまして。ナスター・シャはどうのようなアクセサリーにするの?」

「指輪にでもうつもりです。その、指輪が似合つている人がいたので。フィリアさんはどんなアクセサリーなんですか?」

「私は、これよ。」

胸にかけてあるロザリオをナスター・シャの前に出した。ロザリオの一番大きな石がスクールの精霊石だ。ナスター・シャが覗き込む。まつすぐな強い瞳だ。

「ナスター・シャ。あなた、どうして、スクールに入ったの?そんなに傷だらけになつてまで。」

ナスター・シャが首を傾げる。

「どうしてだろ？ 守られてばかりはいやだから、かな？」

「守られてばかりって……どうしたの？」

ナスター・シャの目から涙が溢れていた。

「あれ？ なんで。わたし。」

「そんな拭き方したら。ほら。傷も開いたら。」

私はハンカチを取り出して、涙を拭う。そして、ナスター・シャの頬に手を当て、治癒の魔法を唱える。

「落ちついたかしら。女の子なんだから、顔に傷を残しちゃダメよ。」

「ありがとうございます。治癒の魔法、すごいですね。」

ナスター・シャが笑顔を作る。どこかぎこちない。健気さに心が苦しくなる。

「あなたの身体が持つている治癒の力を高めただけ。あまり無理しちゃダメよ。」

ナスター・シャが少し困ったような顔をする。ソーニャが静かにナスター・シャの頭の上に降りてきた。どこか頭のくせ毛に勢いが無い。

「ここにちは。ソーニャ。なんか、元気ないわね。」

「それが、朝から家の人に怒られたみたいで。」

ナスター・シャは頭の上のソーニャを気にしながら笑った。今度は表情が柔らかい。

「あなた達、本当の姉妹みたいね。」

「困った妹がいて大変です。」

「なに言つてんのよ。私が姉にきまつてるじゃない。」

ソーニャはナスター・シャの頭の上で暴れている。二人とも楽しそうだ。私も笑顔になる。一人がキヨトンとした表情でこちらを見た。二人も笑顔になる。

「それじゃ、私はもう行くわ。じゃあ、またね。」

「フィリアさん。ありがとう。」

ナスター・シャが元気よく手を振る。ソーニャも頭の上で手を振る。

似ていないけど、似ている一人。彼女達を見ながら思つた。教会へ行こう。そして、ジエラールが無事に帰つて来ることを祈つうと。

1章・8(後書き)

ドウーニヤ「え」と、水20リットル、炭素20kg アンモニア4リットル、石灰1.5kg リン800g・・・。間違った。ソーニャを再生するんだつた。なんか面倒になつてきたわ。このま方が静かで良いかしら。いや、ダメよね。まずは、本体のアホ毛を引っこ抜いて、鉢植えに挿して、水をかけて、陽のあたるところへ・・・。なんか元気ないわね。そうか、肥料が必要だわ。ソーニャの身体を細かく切り刻んで、よく混せてつと。無機化合物になるまで、よくく、発酵させないと。うーん面倒だわ。適当に一緒に埋めといたら大丈夫よね。羽も忘れずに埋めてつと。早く大きくなるのよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2345x/>

たゆたう魂のうた

2012年1月14日16時54分発行